

の擴張につれて益す其事業を盛大にする企てありしかは明治十九年多湖實敏を獨逸に遣し印刷術を研究せしめられしが同じき廿三年歸朝して亞鉛版の新法を傳へらる同じき廿六七年以來専らこの亞鉛版にて地圖を製せらるゝといふされども維新後印刷術のかく發達せしは全く印刷局長得能良介が獎勵の功によれりといふべし

第五十一章 造船并に機械製造業

造船業は既に舊幕府において肥前の飽浦并ツクガに相摸の横須賀に船渠を設け工場を建て、一時事業に着手せしもまもなく天下騒亂せしかば完備にいたらずしてやみしが維新後にいたり明治政府において修築を加へ且大に事業を擴張せられしかば今日の如き壯觀のものとなりぬ 横須賀は三船渠を有し第一及第三の船渠は佛國人フロランの設計にて第一船渠は慶應二年三月舊幕府の起工せしものを維新後新政府において工事を繼續し明治四年一月竣工せしが又これに引つゞきて同じき四年六月第三船渠を起工し同じき七年一月竣工せしとぞまた第二船渠は佛國人ジョエツトの設計にて同じき十三年七月起工し同じき十七年六月竣工せしといふ 其後さらに廣島縣吳港に船渠を設けらる 吳は二船渠を有し同じき十七年六月竣工せしといふ 其後さらに廣島縣吳港に船渠を設けらる づれも海軍技師恒川

柳作の設計なれども其後第二船渠は海軍技師石黒五十二修正せしといふ第一船渠は明治廿二年四月起工し同じき廿四年三月竣工せしとぞ第二船渠は同じき廿七年六月起工し未だ竣工せず蓋し同じき三十一年三月竣工の横須賀は海軍省に屬せしとぞ飽浦は民業に屬して今長崎造船所と稱す この造船所は萬延元年十二月幕府の創建せし所にして明治元年長崎府これを所轄し長崎製鐵所と稱せられしが同じき四年四月工部省の所轄に屬し長崎造船所と改めらる其後長崎製作所、長崎造船局など稱せしもつひに同じき十七年七月に至り其工場を三菱會社に貸與せられ後又拂下となりて其所有に歸せり今は大に工事を擴張して六千噸以上の船舶をも製造するにいたれり 立神船渠は舊幕府の計佛國人フロランを聘し明治八年十二月礎式を擧げ同じき十二年五月に至り竣工せしとぞ又小菅曳揚船渠は元英國人ゴロウルの所有なりしを明治元年政府へ買上げられて飽浦製鐵所の附屬となれるものなりといふ これにつゞきて古き工場は川崎造船所なりとすこの造船所は明治四年十二月明治政所において金澤縣商社の建築せし兵庫縣川崎東出町の製鐵場を買上げられ兵庫製作所と稱し工部省に屬せり其後兵庫工作分局、兵庫造船所など稱せしもこれ又同じき十七年六月三菱會社に貸與せられしが同じき十九年五月川崎正造に拂下げられ其所有に歸し同じき廿九年十月株式會社の組織に改め今は株

式會社川崎造船所と稱すこれにつきては東京石川島造船所なりとすこの造船所は舊幕府の末水戸藩が創建せし所のものにてかの旭日丸を製造せしもの所なりき維新後驛遞局に屬しまもなく海軍省に轉屬し主船局をこの島におきて直轄せられしが同じき九年主船局を廢し築地兵器局に合せられしをもて平野富二元長崎製鐵所長 十年間の借用を請願し海軍省の許を得て石川島平野造船所と稱し専ら造船の業に従事せりこぞこれ民間において西洋式造船業を起したる嚆矢なりとす其後更に三十年間の借用を許され種々の船舶を製造せしが同じき廿二年一月會社組織に改め石川島造船所と稱しついで同じき廿六年十一月さらに株式會社の組織に改めぬこれにつきては大坂川口の大坂鐵工所なりとすこの鐵工所は海軍省の雇英國人ハンダーが明治十四年四月獨力を以て創立せしものにて専ら秋月清十郎にて工場一切の事務を監督せしが船舶製造の外は當時機械工業行はれざりしかば事業とかく振はず種々の困難に遭遇せしも同じき廿年以來商工業一般に振ひ來りここに鐵工事業盛大となりしかば頓に勢力を回復し來れりこぞ其

後同じき廿七年ハンダーの嗣子平野龍太郎英國グラスニューより歸朝し明くる廿八年工場を改築して大に事業を擴張せしこいふこれらの工場は船舶の製造をなす傍蒸汽機械、蒸気々罐、礦山機械、紡績機械、橋梁の類をも製造せり造船業に關しては政府においても大に其必要を感ぜられしかば明治廿九年三月廿三日造船獎勵法^{法律第六十六號}を發布し鐵製又は鋼製の船舶にて總噸數七百噸以上のものに對し十五年間獎勵金を下附せらるゝこゝゝなれりされは近年民業として各地に起りしも大むね小規模のものゝみなるが其中稍見るべきは横濱船渠株式會社^{明治廿二月設立同じき廿九年三月第二船渠築造に着手し同じき廿九年十月竣工しが第一船渠は既に着手せしもいまだ竣工せず}浦賀船渠株式會社^{明治廿九年十月設立同じき廿九年十一月の設立にして目下のところは函}の類のみ

西洋式機械の製作は工部省の三田製作所において種々の機械を製造せられしも民業としてこれらの諸機械を製造するものなかりしかば年々三井物産會社の手によりて輸入せられしが其後明治廿年以來機械工業の著く勃興するや同じき廿四五年にいたりてはこれら機械工場に要する鐵製の諸機械を製造する小工場東

京大坂に續々設立せられたることに同じき廿七八年戦役の際需要多かりしため一時に小工場勃興し今は東京に廿二大坂に廿六の小工場を顯出せりこれら機械工場の中にて其規模鴻大にして而も將來望あるものは東京芝金杉新濱町に設立せられし所の芝浦製作所なりとすこは元明治廿年田中久重が創設せしところにて海軍造兵廠の保護をうけ専ら同廠の機械製作に従事せしが數年を経て資本充分ならざるより非常の困難に陥りしかばつひに同じき廿六年十一月三井家に譲渡すこととなりぬ其後三井家において更に一萬坪餘の海面を埋立て各工場を増築し蒸氣機械、蒸氣々罐、電機々械、紡績機械、礦山機械の類を盛に製造するもここに電機の應用各地の工業に行はるゝに及びて我國隨一の電機々械製造所となれり今はまた造船業をも起す計畫ありといふ

又鐵道事業の開くるに従ひ貨車客車製造の必要起りしが鐵道の貨車客車は明治廿三年四月平岡熙が小石川陸軍砲兵工廠内の工場を借用して日本鐵道會社、總武鐵道會社、關西鐵道會社、北海道炭礦鐵道會社等のものを製造したるをはじめ

とす其後同じき廿九年四月本所錦糸町に移轉し益す其事業を擴張し創業以來十七所の鐵道に關する貨車客車の類を製造せしとぞ今は遞信省鐵道作業局の神戸工場、日本鐵道會社の大宮工場、山陽鐵道會社の兵庫工場關西鐵道會社の四日市工場などにて貨車客車の類を製造するもなほ東京車輛株式會社、鐵道車輛製造所、日本車輛製造所など稱する専ら貨車客車を製造するために工場を起すもの續々いできたれり

第五十三章 西洋式の建築

徳川氏の末に至り一たび海門の鎖鑰をこくや外國人俄に入り來りて鼎の沸騰するが如き有様なりしが西洋式の建築も亦この際必要に逼られてその端を啓くこととなり西洋式の建築は文久二年舊幕府において品川御殿山に木製の英國公使館を建設したるを嚆矢とすこの公使館は英國公使の移住せざる前に浪士の燬く所となりぬこの公使館について舊幕府は芝の田町に外國人接遇所を木製にて

建設せしこいふそのころ薩摩の島津家において米國技師を雇入れ紡績工場を鹿
兒島城下の磯邸に切石をもて建設せり 文久元年着手し同じき三年落成す 其後舊幕府は慶應二年芝
の濱邸内に延遼館を建設すこは木製にして石造まかひなりきこれを當時第一の
西洋式建築なりとす

維新後に至り明治二年の頃清水萬助築地に木製のホテルを建設せしがこれと同
時に我政府は英國人ナートルスの設計にて大藏省所轄分拆場 元傳奏 屋敷跡 を建設せら
れき前者は民間において西洋式の家屋を建設せし嚆矢にして後者は煉瓦造西洋
建築の濫觴なりとす 明くる年五又ナートルスの設計にて霞關兵營、竹橋陣營時計
あるもの 等を建設しつゝいて東京銀座市街の煉瓦屋建築の大工事起れりこは明治五
年郭内より失火して築地海岸まで延焼せしかばこれを大藏省に付して其市街を
改正し一は都府を裝飾し一は火災を豫防する計畫なりきさればナートルスに設
計を命じ五年より八年ごろまでに落成せり其後佛國人ポアンピル來朝し工部大
學校九印刷局等を設計してや、一生面を開きたりしがつゝ、いて英國人コンダー

來朝し同じき十一年上野の東京博物館を設計せし以來引つゞきて公私の建築を
設計せしもの二十二に達せり 別表を參照すべし 我邦における西洋式の大家巨屋は大抵彼
が設計によりてなれるものこいふべきか彼が我西洋式建築に與へたる利益も亦
多かるべし同じき十八九年ころより工部大學校を卒業せし辰野金吾、米國に留
學せし妻木賴黃等によりて設計せられコンダーの設計と相待ちて大に西洋式建
築の増加をみるに至れり我邦西洋式建築物中有名なる日本銀行 石造二十九年落成
成辰野金吾設計 東
京府廳 煉瓦二十七年落成
成妻木賴黃設計 東京商業會議所 煉瓦三十二年落成
成妻木賴黃設計 京都帝國博物館 煉瓦二十八年落成
成片山東熊設計 の
類いづれも我日本人の設計になれるものなり

これを要するに我國における西洋式の建築は端を文久二年に發するもナートル
スの來朝までは和洋折衷に過ぎざりしがこの人來朝して漸く純然たる西洋式の
ものさなりぬさはいへなほみるに足るものなかりきポアンピル來朝して工部大
學校、印刷局を建設するに及びてやうく、西洋式建築の真相を我邦人に紹介す
るに至れりついでコンダー來朝し明治十一年以來公私の爲に建築の設計をなし

ますく西洋式建築の真相を發揮せしはこの人の力なりき又この際工部大學校の建築部卒業生中海外に留學せしもの續々歸朝し外國人の設計を待たずして種々の建築に従事することなれりこにかく我西洋式建築上一大進歩といふべし

英國人コンダ設計の建築物

建築物の名稱	起工	落成
東京帝室博物館	明治十一年	明治十四年
永代橋開拓使	同 十一年	同 十四年
東京帝國大學法文科	同 十三年	同 十五年
鹿鳴館	同 十三年	同 十六年
有栖川宮御殿	同 十四年	同 十七年
北白川宮御殿	同 十四年	同 十七年
陸軍大臣官宅	同 十七年	同 十九年
内務大臣官宅	同 十七年	同 十九年

外務次官官宅	同	同
日比谷海軍省	同 十八年	同 二十年
狸穴川村伯爵邸	同 二十三年	同 二十七年
駿河臺ニコライ會堂	明治十五年	同 十七年
深川岩崎男爵邸	同 十四年	同 十八年
米國公使館木造	同 十八年	同 二十一年
東京俱樂部木造	同 二十年	同 二十一年
神田錦町青年會	同 二十五年	同 二十七年
丸の内三菱會社	同 二十五年	同 二十七年
明治生命保險會社	同 二十六年	同 二十八年
日本郵船會社	同 二十六年	同 二十八年
獨國公使館	同 二十六年	同 二十八年
伊國公使館	同 二十七年	同 二十九年
澳國公使館	同 二十八年	同 二十九年
	同 二十九年	同 三十一年

增訂 日本工業史 終
三版

明治三十一年十月十日訂正再版印刷
明治三十一年十月十五日訂正再版發行
明治三十五年七月二十日訂正增補三版印刷
明治三十五年七月廿五日訂正增補三版發行

著者

橫井時冬

東京市牛込區東五軒町十一番地

發行兼
印刷者

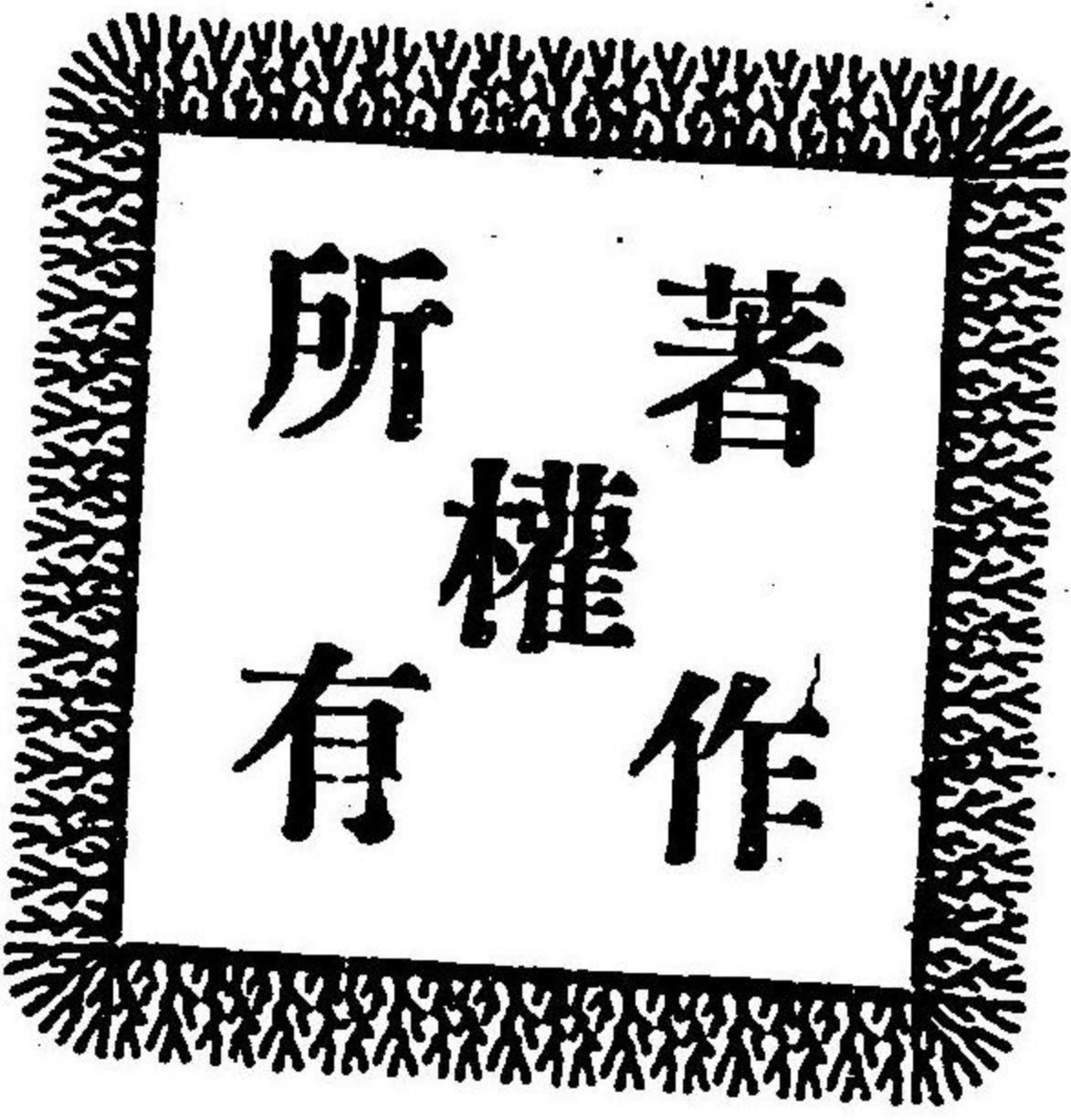
吉川半七

東京市京橋區南傳馬町
一丁目十二番地

印刷所

吉川印刷工場

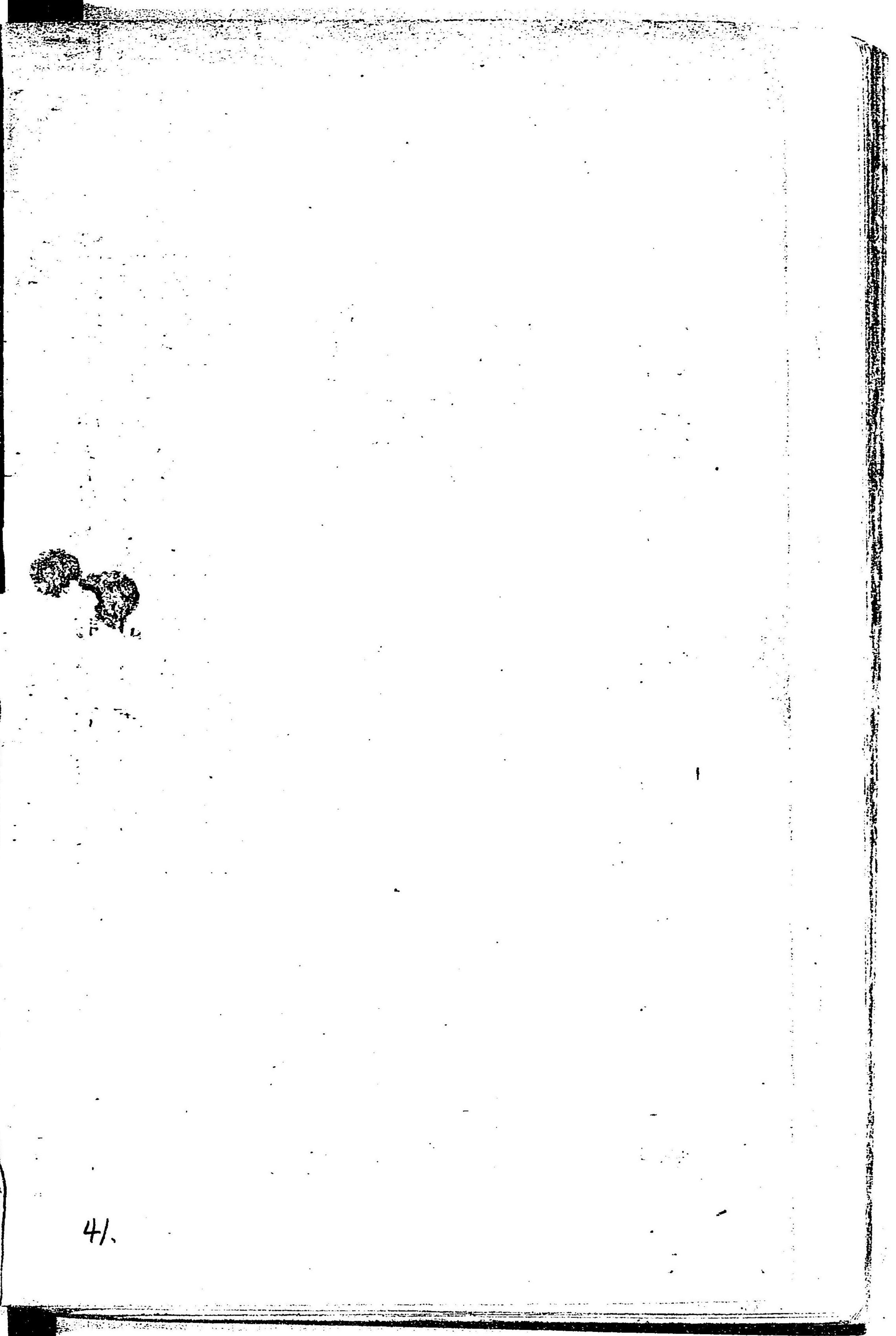
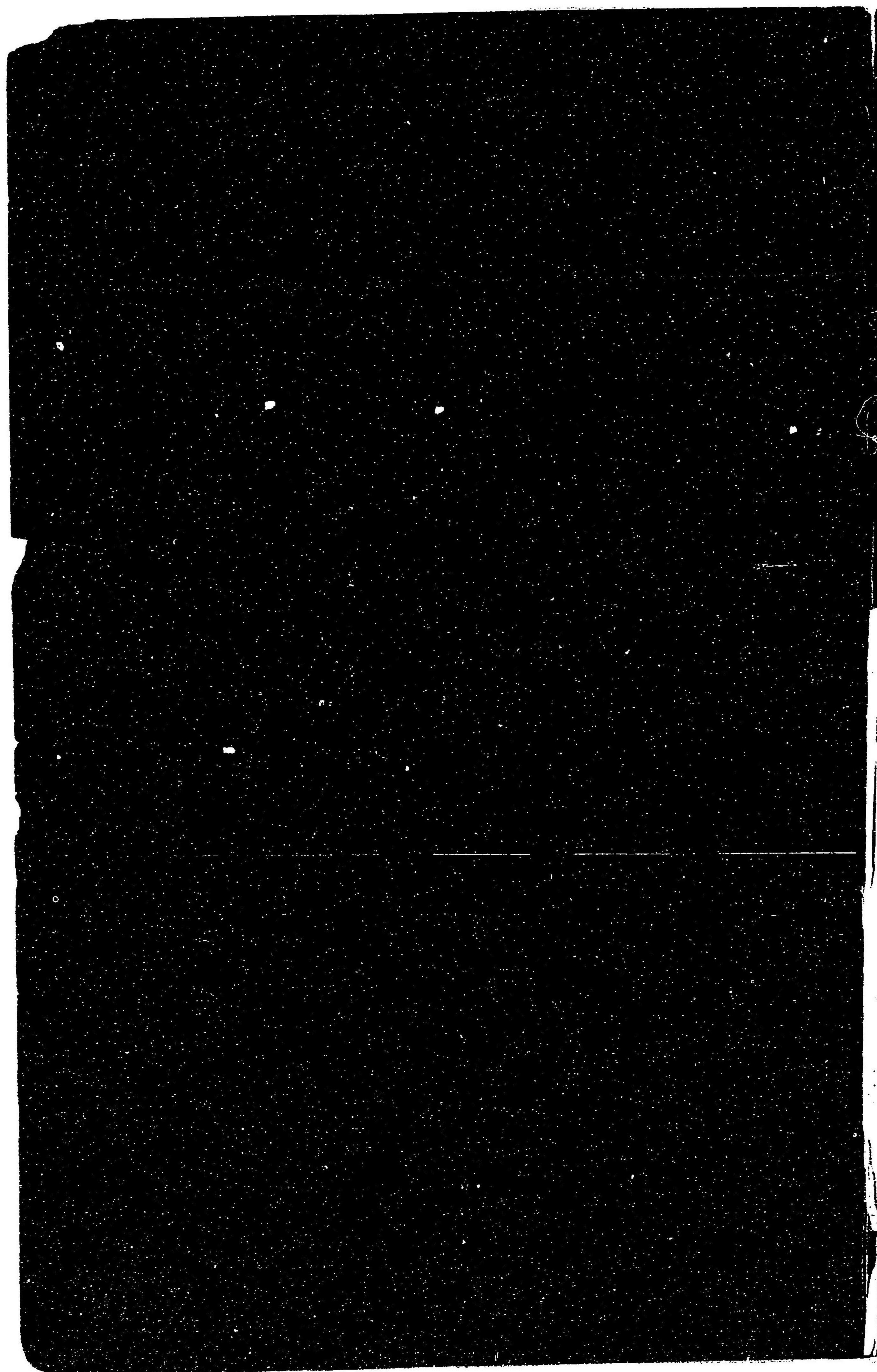
東京市京橋區柳町五番地



發行所

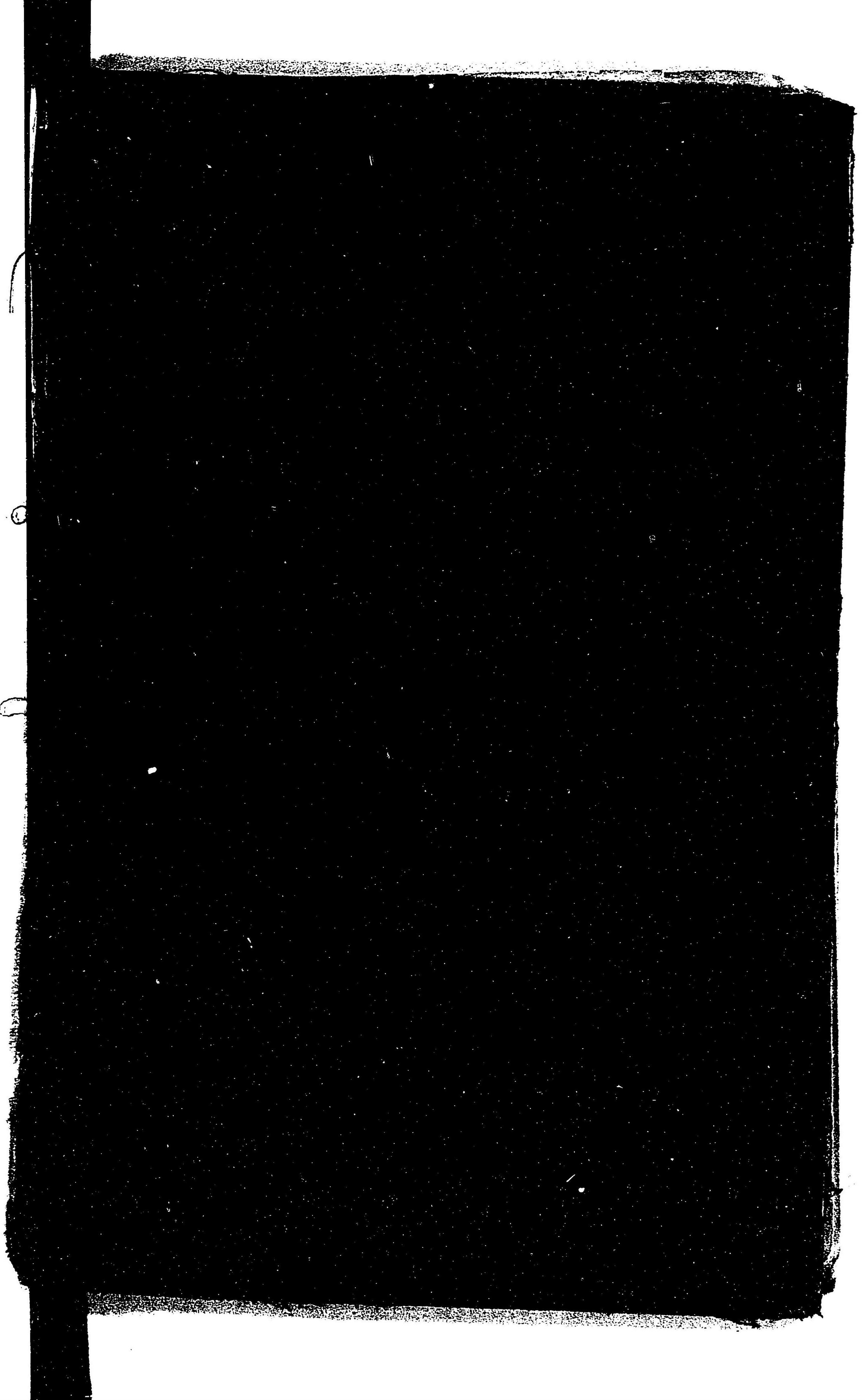
東京市京橋區
南傳馬町一丁目

弘文館



41.

77
1881



043043-000-9

77-155

日本工業史

横井 時冬/著

M35

BDK-0112



